



日本における「遺産」と歴史学の関係についての考察（特別寄稿）

シヨンコイ, ガーボル
市原, 晋平

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:85-97

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489537>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489537>



日本における「遺産」と歴史学の関係についての考察

シヨンコイ・ガーボル

(訳・解題：市原晋平)

訳者解題

本エッセーは、二〇二二年九月一二日から二六日までの約二週間、神戸大学に招聘されたシヨンコイ・ガーボル氏（ハンガリー語の人名表記の慣例に従い、日本語同様姓・名の順で表記）が、日本での経験から得られた知見や巡らせた考えをつづったものである。シヨンコイ氏は現在、ハンガリーのエトヴェシュ・ローランド大学（ELTE）の人文学部歴史学科教授および大学院博士課程歴史学部門主任を務める歴史学者であり、ハンガリーなどの中・東欧地域を対象とした近代都市社会史や、近現代世界における「遺産」概念の形成や変容に関わる概念史を専門としている。とりわけ、「遺産」の歴史研究に取り組む近年のシヨンコイ氏の研究は、現代における文化財保護の在り方を規定する歴史的背景の探求に加え、学術的に確定された過去としての「歴史」と、過去の「大衆的／通俗的」認識形態としての「遺産」を区別し、その「遺産」の各時代・地域ごとの取り扱われ方の検討を通じて世界やその中の各文化圏の特徴をも議論の俎上に載せるものである。本文を一読いただければお分かりいただけるように、彼が注力するメイントピックの中にはグローバル化した現代世界における過去認識の在り方やその制度化、という現代的主題も含まれる。こうした彼の研究姿勢は、少なくとも平均的な日本の史学科が取り扱う範疇を超え、歴史学の関連領域として近年日本でも注目が高まっている「歴史理論」や「パブリック・ヒス

トリー」といった分野のみならず、社会学や地理学、哲学など、人文・社会科学のより広範なディシプリンとも刺激的な対話を可能とする射程を有していると言える。¹⁾

シヨンコイ氏の招聘は、神戸大学人文学研究科とELITEとの間で締結されている学術協力協定及び人文学研究科の奥村弘教授（二〇二二年当時は神戸大学理事・副学長）が研究代表を務める科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」における研究協力の枠組みで実現した。当初、二〇二〇年に予定されていた招聘事業は新型コロナウイルスの世界的流行のために延期され、二〇二二年によりやく実現することとなった。シヨンコイ氏は日本滞在中に神戸大学にて「Current European Cultural Heritage Policy and the European Heritage Label -- from a historian's perspective」および「Contemporary Hungary between History and Heritage -- the political uses and abuses of the past」と題する二度の講演を行ったほか、京都、奈良、神戸市内の「遺産の場」をそれぞれ訪問し、日本の文化財保全をめぐる現状についての理解を深められた。奥村教授をはじめとする人文学研究科関係者との座談会や会食にも参加され、研究者間での意見交換を行うなど、二週間という短い期間ながら非常に活動的な毎日をお過ごされた。

なお、エッセー本文中にも言及があるように、京都訪問では、京都府京都文化博物館学芸員の村野正景氏、シヨンコイ氏と国際共同研究プロジェクトの立ち上げを進めている社会心理学者の打田篤彦氏（現・神戸大学人間発達環境学研究科助教）、神戸大学人文学研究科の市沢哲教授に、そして奈良訪問では、神戸大学人文学研究科の古市晃教授に、それぞれ大変な便宜を図っていただき、シヨンコイ氏の日本滞在がより充実したものとなることに大きくご尽力いただいた。この場を借りて、心からの感謝を申し上げます。

註

（一）シヨンコイ氏の近年の議論の詳細に関しては、以下を参照。シヨンコイ・ガーボル、奥村弘 根本峻瑠、市原晋平、加藤明恵者・訳『ヨーロッパ文化遺産研究の最前線』神戸大学出版会、二〇二三年。なお、以下の註もすべて訳註である。

私たちがようやく奈良に着いた時、大雨が降っていた。招聘客員教員として神戸に滞在した二週間のうち、実際に雨が降ったのはこの日だけだった。滞在中に台風が本州南部を通過し、神戸とその近隣地域では数日間鉄道などの交通機関が運行を停止したものの、大した雨は降らず、周辺に大きな被害は出なかった。それでも私は、公的な安全対策を通じて、日本の社会と国家が起こりうる自然災害に対していかに万全な備えをしているかを目の当たりにした。受け入れ機関である神戸大学の面々の平静で責任ある姿勢も、日本社会がいかに大災害に慣れているかを示してくれた。神戸での滞在はあらゆる面で、日本における「遺産」保全の特殊性を理解するために有益だった。台風の到来は、日本の文脈ではなぜ「遺産的」な建築物の保存以上に、建物や工芸品を作り出す知やノウハウがより重要なのかを理解する一助となった。

雨は奈良を霧に包み、その神々しい雰囲気をさらに高めていた。前回の来日時に世界的に有名な奈良の仏教寺院を訪れていたのも、今回の訪問では神道の領域、つまり神社及びその他の宗教的な遺跡や記念碑に私はより強い関心を持ち、その見学に集中することができた。奈良の神道建造群が織りなす雰囲気は、日本という文明に深く根ざした自然と文化との千年来の調和を証明してくれただけでなく、西洋の学者が確立した世界宗教の

まったく不当でオリエンタリズム的な分類をも証明してくれた。諸文明や諸文化に対する進化論的アプローチは、ヨーロッパの近世にまでさかのぼるが、それは西欧の帝国やアブラハムの宗教（キリスト教、ユダヤ教、イスラム教）がその他の文明・文化に対して優越性を持つという根拠のない考えに基づいている。このアプローチでは、世界中の宗教が極度に単純化された進化的な序列の中に位置づけられる。一神教的な宗教（主にアブラハムの三大宗教）がその中で上位を占め、多神教的宗教や最も発展が遅れていると見なされたアニミズム信仰がそれに続く。こうした世界宗教の体系は西洋的な発想に基づいており、そこでは、アブラハムの宗教以外の宗教が神や半神、自然、魂、世界の創造などをどのように考えているかを定義したり、理解しようという試みなどなされない。奈良における神道の至高の調和と、自然そのものや自然的及び超自然的な力を擬人化した表現は、西洋によるお決まりの宗教分類法がいかにうぬぼれており、尊大で、誤解を招き、近視眼的なものであるかを私に例証してくれた。またそれは同時に、日本という文明とその「遺産」には、謙虚に開かれた心で接しなければならないことも私に教えてくれた。神戸、京都そして奈良で過ごした二週間、私は日本における「遺産」の意義を偏見のない視点から理解しようと、少なくとも理解し始めようと最善を尽くし、そうする中で私の西洋主義的なアプローチは徐々に脱構築されていった。奈

良に滞在したのは二週間の滞在のうち一日だけだったが、この訪問は私にとって極めて重要な出来事だった。一九九四年の「オーセンティシティ（真正性）」に関する奈良ドキュメント¹が、それ以前はヨーロッパ中心主義だった「真正性」というユネスコ世界遺産の原則の定義をグローバル社会により適合したものに变えたように、奈良の神域の静謐さが世界的に認知されることで、非アブラハム系宗教は、数世紀にわたって展開してきた西洋の進化論的分類の束縛から解放されることになるだろう。

短いエッセーで奈良の壮大な「遺産の場」について正當に評価することは不可能であり、その評価の試みは一冊の本に値するだろう。その現状は、一般的に「遺産化」の必要条件であるところの「断絶」に関する問いを提起している。奈良の場合、その「遺産」の保存を大部分において正当化しているのが、魅力的な地域的实践（宗教的な礼拝や文化的な実演行事）の継続性なのか、それとも加速度的に近代化する（あるいはポスト近代化する）日本社会においては失われてしまった世界を証明するものとしての顕著な独自性なのか、それを判断することは私には困難である。多くの「遺産」がそうであるように、奈良の「遺産」群もまた、その保存に参加する社会的行動主体が非常に多様であることや、あらゆる「国定遺産」の保存について、地域の伝統や様々な「ステークホルダー（利害関係者）」の役割を重視することなしに一般化することは誤解を招くということこ

とに注意を促してくれた。奈良での「ステークホルダー」は神主、実演者、学生、学者、観光客などかもしれない。彼らは、日本人であるかもしれないし、外国人であることもあるだろう。

日本での二度の短期滞在は、日本の文化や「文化遺産」の奥深さを理解するには十分だったとは言えないものの、組織的協力関係の枠組みで具体的な宿題を携えて来日したことは、私自身の基準点を見出すのに大いに役立った。COVID-19によるロックダウンから日本が再び開かれてから数週間後の二〇二二年九月、私は幸運にも神戸大学、国立歴史民俗博物館、ブダペストのエトヴェシュ・ローランド大学、ハンガリー国立博物館、イーストアングリア大学の学術協力協定の枠内で、神戸、京都、そして奈良を訪れることができた。

私の正式なホストは神戸大学人文学研究科の奥村弘教授だった。同研究科助教（当時）の市原晋平先生には全般的な案内とお世話をいただいた。お二人には深く感謝している。奥村教授は、個人的な安らぎと専門的な興味を抱かせる環境を作ってください、それが私の滞在を支えることになった。したがって、私の二週間は、講演、座談会、夕食会、現地視察、カフェでの会談といった友好的な機会であちが満ちていた。その中で、私は歴史や文化に通じた日本の素晴らしい学者たちと知り合いになっただけでなく、彼らの考え方、日本の歴史と社会についての現在の諸前提、疑問、探求にも触れることができた。市原先

生は、ハンガリーの歴史と文化について素晴らしい知識をお持ちで、私の日本文化への旅を、豊かで、複雑で、心温まるほど個人的なものにしてくれた。彼らの役割は私の滞在において決定的なものであったが、日本の学術界に対する私の理解を豊かにしてくれたその他の対話者たちについても言及しなければならぬ。私の日本での研究パートナーである打田篤彦先生(現・神戸大学人間発達環境学研究科助教)には、京都にて、保存状態がよく、実に居心地の良い古い建造物群を案内していただいた。京都文化博物館の学芸員である村野正景先生には、彼の博物館で丁寧実践されてきた京都での「遺産の構築」を基盤とする「町づくり」に関する興味深く心のこもった講義をしていただいた。神戸大学の市沢哲教授には、村野先生との会合を仲介していただいた。古市晃教授には、奈良をご案内いただき、奈良の歴史や日本の伝統的演劇の重要性を心を込めて説明していただいた。私の一度目の来日の際に私や同僚の教授陣のホストとなっていたいただいた油井清光教授は、今回の神戸大学での講演が終わった後に、日本の遺跡を「欧州遺産」として認定することを提案してくださった。それが実現すれば、日欧間の文化協力において長期的に見て先駆的な効果をもたらすことになるだろう。大津留厚名誉教授は近・現代の中欧の歴史に関する知識で私を驚かせてくれた。長坂一郎人文学研究科長は、日本建築の第三の、そして最も無視されてきた源流である農村建築の

土着的伝統について情熱的に説明してくださった。これらの優秀で傑出した研究者たちは、私が現代日本における「文化遺産」の役割を理解するのに大きく貢献しただけでなく、彼らのおかげで、私は日本の学術と学問にもっと魅了されることとなった。学術的にも個人的にも価値の高い議論やディベートのおかげで、私の無知と日本文化の圧倒的な複雑さとの間の一見架橋しがたい距離をかなり縮めることができたのではないかと思う。

こうして、現代ヨーロッパとハンガリーの「遺産」保全の状況を日本の人々に伝えるという私の使命は、決して望みの薄いものではなくなった。私は確固たるモデルと明確に範囲の定められたアイデアを持つて日本に到着したもの、それらは滞在中に修正された。日本での数多くの出会いの結果、私がお伝えしたことが日本の人々の要求に沿う形になっていたことを願っている。神戸という都市が、港町として、またグローバルな課題に対してオープンな都市としての伝統を有することも、私たちの議論に影響を与えたと確信している。

私の訪問が非常に好ましい知的環境の中で行われたおかげで、過去解釈の二つの対立する制度化された形式としての「遺産」と「歴史」との関係、日本という文脈の中で実験することが可能になった。日本近・現代史の優れた研究者である奥村

教授が、私に特別な研究課題を課して神戸に招いたのは偶然ではなかった。過去解釈の多元化、記憶の政治の台頭、そして現代の脱工業化社会の高齢化は、結果的に、世界中で歴史学への不信を部分的に高めた。また同時に、私たちの時代において、人々は過去に対してかつてないほど魅了されており、自分たちの（でつち上げられた）過去について熟知していると主張する社会的行動主体が急激に増加している。そして同様に、新しいものを必死に探し求める消費社会の論理によって、具体的な過去の痕跡、文書や遺物はめちやくちやにされており、伝統的な知や実践は顧みられることもなくなっている。現代はこのように特徴付けられる。こうした全般的な不確実性の中で、「文化遺産」は、過去を想起させるものを正典化し保存する手段として、そしてまた新たな学問分野として制度化された。これは歴史記述に対する最も顕著な挑戦である。したがって、「歴史科学」と「文化遺産」という、現在の目的のために過去を解釈する最も確立されたこの二つの領域を区分することは、地球規模で妥当性を有している。私の日本滞在中の主な問いは次のようなものだった。この区分は、歴史学が長く確立された伝統を持ち、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて「世界遺産」という概念の刷新に重要な役割を果たしたにもかかわらず、この「歴史」と「遺産」という二つの領域が対立し、密接に関連する概念であることが自明と見なされていないこの日本という国でも

有効なのか、そうではないのか。この問いに答えようとして私は、将来のより深遠な分析も念頭に、二つの領域を比較しながら定義するための指標（時間認識、イデオロギーの内容、歴史家の役割、など）を見つけようと謙虚に試みた。

私の第一印象は、「文化遺産」を政治に引き込む力が重みを増すことで、歴史家たちはこの自身の学問の周縁領域に対してもっと意識を向けるようになるだろう、ということだ。この世界的な現象には、奥村教授も相応する日本での事例に言及しつつ同意した。「歴史」と「文化遺産」の間のグレーゾーンの重要性を強調するのは、おそらく正しいことだろう。このグレーゾーンは、一般的には学術的な歴史学に基づいている。しかしそうしたグレーゾーンは専門家ではない一般大衆との距離が歴史学の世界よりも近いゆえに、そこでは、時間や過去に対する社会的な認識の変化に対して、学術的に確定された歴史それ自体よりも迅速に追従することが大目に見られる。このグレーゾーンは、神話から歴史教育に至るまで、過去に対する多種多様な通俗的解釈として認識することができる。一九七〇年代の時代錯誤的な傾向が学術的な歴史学の信頼性を失わせ、「文化遺産」の台頭を導いたことで、たとえば学校で教えられ、博物館でしばしば表現されてきたような世間一般の歴史認識は、年表に基づいたものからテーマ別の歴史教育へと移行した。そこ

では、国家の歴史（ナショナル・ヒストリー）や政治史の膨大なデータによつて成立した年表はもはや問題のあるものと見なされるようになり、重要視されなくなつた。歴史教育の再重点化は、教師、学生、博物館関係者、そして訪問者を感じ覚的な過去認識へと関与させるための方法を「遺産」に与えた。学校での歴史教育改革、博物館の刷新、そしてかつて歴史学における周縁であつたこの「遺産」がカバーする領域の学術的制度化の様式は、国やそこでの学問的伝統によつて異なるかもしれない。しかし、一つの特徴は共通している。つまり、それらは学術的に確立された「歴史」やアカデミックな歴史研究者の権威に挑戦しているのである。近年の「文化遺産」の概念的発展の影響を、「無形文化遺産」が人類学や民俗学に与えた影響と比較することはできないものの、歴史家は、「文化遺産」概念の新しい、歴史学においてかつて周縁的だつた「文化遺産」に関連する分野がはつきりと制度化されたことを無視すべきではない。専門家社会以外の領域からの歴史学的な「歴史」の全般的な後退は、歴史学の周縁領域でも同様の傾向を伴いながらから継続するのではなく、むしろこれらの周縁領域の再評価を伴いつつ生じるはずである。言い方を変えれば、アカデミックな歴史学は、歴史学においてかつては周縁的な位置づけにあつた「遺産」に関連する部門が、それ自体の独自の分野に変化していることに気づくかもしれない。「歴史」と「文化遺産」を隔てるファジー

な境界線は、「文化遺産」の側からだけ透過が可能なわけではない。「遺産」は現代史における適切な研究対象であることは判明している。その研究のためには、この領域に関する十分な知識だけでなく、時間の捉え方やイデオロギーの内実に関わる指標を考慮することを通じて、適切な批判的アプローチと、歴史家が当該共同体で構築されたアイデンティティを横領することとの間のバランスを取りつつ評価をすることが必要となる。日本の歴史家が「文化遺産」に関する最近の概念的発展に対する自覚を高めることができれば、現在主義的な過去認識とこれに適合した慎ましい期待を橋渡しする局面において、より決定的な役割を果たす助けとなるのみならず、それ以上のことができるかもしれない。

「歴史」と「遺産」の対比を理解するという目的に沿って、私はグレーゾーンの定義、伝統の制度的あるいは準制度的な形態、過去の評価を探っていた。そしてそれらを、神戸、京都、奈良での私の対話者たちから、そしてそれぞれの「遺産の場」での体験を通して得ることができた。私は日本史の専門家でも日本の「遺産」の歴史の専門家ではないため、この短期間の訪問で私が発見したグレーゾーンは、すでに歴史的に容易く分析されているかもしれない。とはいえ、これらは日本における「遺産」と「歴史」の関係の点で重要であるだけでなく、グローバルな歴史記述の文脈でも同様の問いに貢献することができる。

また、「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」が世界的な影響を有し、「無形遺産」という概念や「批判的遺産研究」ととつてのみならず、文化の実践を「遺産」としてリスト化及び格付けすることが持つ落とし穴やその影響力に注目する文化人類学者にとつても重要な参照点となったように、歴史学では部分的に無視される一方、記憶の政治のため、あるいは過去を商業化するために活用・利用されているグレーゾーンを歴史学的に検証することは、歴史叙述の在り方を刷新するかもしれない。こうした歴史学の動きは、歴史家が研究領域を拡大したり、これらの領域を歴史学に（再）統合するために現代史研究の新たな方法論を開発したりすることの助けとなるだろう。日本の歴史学が、日本の歴史的な都市や農村における私的・公的空間の構造を研究してきたことは間違いない。また、温泉街の歴史とそれに関連する文化的・社会的実践についても、日本では恐らくかなりの学術的蓄積があるはずだ。私が言いたいのは、私が短期間で発見することができた日本のこれらの分野は、記憶の政治による捏造や「遺産化」の観点から利用される可能性を大きく秘めているということである。以下では、日本で私が出会ったことのできた神戸、京都、有馬温泉での事例を紹介したい。

神戸大学での講演で私が提示したように、「歴史学」と「遺産」は両方ともに、近代化が伝統との断絶をもたらした結果生じた。

近代化の成功によつてこの断絶が拡大した時に、遠い過去は歴史の専門家たちによつて近代的なアイデンティティの構築に利用され、他方で既知の伝統的世界の喪失とそれへの郷愁は歴史の専門家ではない素人によつて記録されるようになった。そうした変化は世界的に起こっていたことだが、そのペースは、近代化の到来のタイミングやその起源（外部に由来するのか、内発的なのか）に応じて、大きく異なる。日本の文脈では明らかに、明治維新が決定的な断絶として重要であろう。しかし、その他の先進諸国と同様に、明治の諸改革は伝統的な世界をすぐに拭い去ることはできなかった。日本社会は、そうした伝統を成り立たせていた今や消えゆく条件や慣習にしがみつく方法を数多く発見した。近代化の欠点がますます露骨なものとなった時に、消えつつある過去の世界への郷愁はますます目立つようになつた。この郷愁は、つまり現在に対する不安と未来への恐れに基づく感情であり、政治的運動において、そして過去の商品化によつて、ますます利用されるようになっていった。一九八〇年代以降、前者は「遺産の政治」となり、後者は「遺産ビジネス」となった。とはいえ、「遺産」に関わる言説によつて、一般の人々の過去に対する解釈の枠組みを作り出し、伝統的实践を「無形遺産」として保存するための一般的な形式や活動をはつきりと表現することも可能となる。そのため、「遺産」という領域は、公式の歴史記述では無視されてきた過去をめぐる様々な声を伝

える制度的枠組みとなりうる。それゆえ、過去の解釈のグレイゾーンには、実にさまざまな方針を有する、実にさまざまな社会行動主体がひしめき合うことになる。

西洋の歴史学においては、グレイゾーンの探求は一連の諸「転回」（文化論的転回、言語論的転回、ポストコロニアル転回、批判論的転回、地球的転回（グローバル・ターン）、空間論的転回など）を通じて行われた。それは同時に、公式の歴史学が確立した時点から続くパラダイムに疑問を投げかけ、通俗的な過去の解釈をも包含しようとするものであった。この一連の問い直しの中で、空間論的転回の影響はいまだ顕著である。その主要参考文献であるアンリ・ルフェーヴルの『空間の生産』（*production de l'espace*）（原著フランス版初版、一九七四年）^②は、現在の研究提案書や研究計画においても、いまだ定期的に引用されている。本書は、「哲学者たちの空間」であるところの精神的空間（メンタル・スペース）と私たちすべてが生きている物理的・社会的領域であるところの現実的空間（リアル・スペース）の間の調和を模索するもので、主に西洋の事例に依拠していた。アンリ・ルフェーヴルは、その探求の過程で、空間の意味に関する理論体系やイデオロギーの考察から、家庭や都市といった日常生活における体験の検討へと移行していった。その議論の中で彼は、異なる社会主体がそれぞれ異なる形で独自の

社会空間を生産していると述べ、歴史において中立的な空間は存在しないと指摘した。彼の研究はフランス思想に深く根ざしたものだだったが、世界的に革命的なものと受け止められ、異なる文化や文明における空間の生産を比較する際に参照されるようになった。空間の生産の古い伝統や、近代的な空間が圧倒的に生み出された中でそうした伝統が生き延びたこと、そして伝統的でローカルなものと近代的でグローバルなものとの結果的な対立など、が日本においてどのようなものであったか、私はほんの少ししか知らない。とはいえ、私はオギュスタン・ベルクの『風土としての地球』（*Médiance : de milieux en paysages*）（原著フランス版初版、一九七四年）^③が非常に印象に残っている。この本の中でベルクは、「風土」などの日本の伝統的な領域概念を用いて、「領域化」という西洋が抱えるジレンマや、その中で個人や共同体の役割に対する解決策を提案していた。私はベルクの仕事を、空間と領域の社会的構築を科学的に解釈しているという点で、ルフェーヴルのそれと同じくらい土台となる研究だと考えている。伝統的な日本の空間認識と空間構築の在り方が、過去を「遺産」として解釈することに関連して生じる現代の対立を理解し、アイデンティティの構築というグレイゾーンを人文・社会科学の範疇に組み込むための解決策を提供するのに非常に適しているということを、ベルクの作品は私に証明してくれたのだ。

空間の生産という観点から言えば、私は滞在中、主に四通りの「遺産化」を目撃することができた。奈良の神域における文化と自然の調和、つまりレイヤーの異なる複数の神聖性の間の模範的な調和については、すでに簡単に触れた。この神聖な景観の生産と現在におけるその利用を論じるには、奈良における神道について、そして外部の社会的行為主体によるその「遺産化」についてのより多くの知識が必要である。将来的に、この研究分野に力を注ぐことができれば、大変喜ばしいことだ。奈良は私をすっかり魅了したが、都市そのものの「遺産化」や、遺産を展示するためにデザインされた都市空間の方がよりなじみあるものを感じた。都市史研究者として、私は市内の博物館やその他の「遺産」展示の場において都市がいかなる自己表象を行っているのかを探索することにいつも熱中しているのだ。そうした場所は、その都市の特殊性やアイデンティティを表現する場として構築されている。その意味で、近代的な建造物の連続からなる港湾都市である神戸と、「世界遺産」や観光名所、そして注意深く保存された身近な「遺産」群に満ち溢れた素晴らしい「遺産都市」である京都の違いは明白なものである。この違いは、日本の伝統の中で生産されてきた空間の多様性について学んだとき、より興味をそえられるようになった。私のこの分野についての知識は不完全であり、誤りをも含むだろうこ

とはほぼ間違いない。しかし、エッセーという自由な記述が許されているジャンルに甘えて、私は自身の認識と理解に基づいてモデルを構成してみたい。願わくば、「遺産的空間」の生産が、過去と伝統に基づくアイデンティティ構築というグレーゾーンを分析・把握するために適切な方法であるかどうかということに対して、日本の同業者の方々からコメントや修正をいただければありがたい。

先に述べたように、長坂研究科長は、日本の土着的な農村建築の重要性に私の目を向けさせた。それは、日本の建築史においては、世俗建築及び宗教建築に見られる中国由来の外的な建築様式の伝統と比べ、通常無視されがちなものだった。幸運にも打田先生と訪問することができた京都の伝統的な家屋である町家では、西洋建築のアプローチによって決定づけられた現代日本の都市空間の編成とは異なる、古い日本的都市住宅における伝統的な空間構成について学ぶことができた。市原先生は、見事に保存され商品化された有馬の温泉街に私を連れ出し、そこにある博物館で、日本の伝統的な部屋の名称や概念が、西洋の伝統のように物理的な広がりによってではなく、その空間の持つ機能や人との距離感によって定義された空間認識と関連付けられているということを説明してくれた。建物を構成する個々の単位(部屋や広間など)に対して適用される日本人々の考え方は、伝統的な和風建築と洋風建築のそれぞれに対して

異なるとも説明してくれた⁴⁾。私は日本語を話すことができないので、この哲学的な深淵の表面をかすめることしかできなかった。それでも、私はすぐにベルクの「風土性」(médiance)という概念を思い浮かべた。この概念は、空間と文化をグローバルに理解するために空間に対する日本の伝統的アプローチを活用すべく考案されたもので、ベルクによれば日本での空間の在り方は、建築物の形態や物理的な広がりによってではなく、人間関係や機能性によって確定されると言う。繰り返すが、「奈良ドキュメント」が「無形遺産」という概念の構築に貢献し、西洋的なアプローチによって独占されていた「遺産」に対する捉え方を変えたように、日本の伝統的な空間構築の様式は、空間・領域と社会・文化の間の関係性に対する世界的な理解を変革することができるとはならない。物理的な範囲や境界線や区画によってではなく、そこに人間が存在することによって確定される空間という概念は、解放的で爽快である。それはまた、分析や比較のために学術的に構築された非人格的な空間よりも日常的な実践の中で習慣的に利用される空間の在り方により近いと言える。

この意味で、よく保存された状態で観光客に公開されている神戸の旧居留地と、打田先生と訪れた京都の伝統的な町屋は、二つの異なる領域に属する。前者は西洋建築様式が日本に上陸した証しであり、観光地としてしかるべく「遺産化」されている。

この領域の探求は、港湾都市として、また国際都市としての神戸の近現代史を知る上では有益であろう。しかし、それは一方で、グローバルな歴史分析の表層を示している過ぎない。西洋との商業的な遭遇は世界中で見られ、そのための大規模な商業中心地もいたるところで設立されたからである。神戸の西洋建築は、そのオリジナルの様式と異なるところはない。この種の遭遇は、二つの文明の対等な交流というよりも、西洋的に構築された空間の導入という方が近い。これとは対照的に、打田先生や現地の博物館学芸員である村野先生が素晴らしい情熱と愛着と知識でもって紹介してくださった京都の様々な「文化遺産」は、明らかに観光客の目的地ではないし、商品化もされていない。こうした空間への訪問は、日本の伝統的な空間構築を学ぶための集中講義のようなものだ。私にとって、このような場を訪問することの最大の価値は、現地の人々の伝統に入門するためにガイド役の方々から個人的な配慮を受けられることである。このような個人的な配慮は、西洋近代的なアプローチにおける非人間的な生活や非人間的な空間構築とは衝撃的な対照をなしている。

驚異的に近代的で現在主義的な日本社会は、欧米諸国と同様に近代化の帰結に苦しんでいる。疎外感、過度な利己主義、人間性の欠如、参照点の喪失、商品化と商業化などが目に見えて

存在する。しかし、人格主義的な伝統も今なお強く残っている。私はそれを、人間国宝という制度、伝統的な日本の空間の構築、茶道における抹茶の点て方やふさわしい茶器の選定などの日本の伝統の意味、といった様々なグレイゾーンの中に知覚することができた。それはまた、「町づくり」という実践の伝統の中にも顕著である。残念なことに、「遺産」に対する参加型の管理や統括に関する現在のグローバルな言説の中では、この実践は不当なほどに注目されていないのだが。日本では（人間的に）適切に築き上げられた「有形遺産」と、人間の平等や自然に対するよく考えられた敬意を示しつつ心を込めて伝達された「無形遺産」の間の調和が、数多くの社会的実践の中になおも存在する。それを私は、京都の町屋や京都文化博物館だけでなく、都市の中の銭湯や伝統的な温泉街でも、目の当たりにすることができた。イタリアが近代化の破壊的な影響を打ち消すために「スロー」というコンセプトのもとに自らを再定義したように、日本もまた、古くからのアニミズム信仰や神道に深く根ざした自然や自然的諸元素の擬人化、そして私的空間の構築といった、ユニークで貴重な前近代の伝統を活用することができた。かつてスタジオジブリのアニメが空前の成功をおさめ、多くの欧米のスタジオに勝利したのは、日本の人格主義の伝統を勇敢かつ革新的に表現したおかげだろう。こうした魅力的な事例があなたの方日本の歴史家に提示しているのは、過去を基盤

とするアイデンティティ構築という丁寧に扱うべきグレイゾーンを占有するただけにこうした日本の伝統を利用するのではなく、こうした伝統を通じて、欧米発ではない日本のアプローチに基づくグローバルな比較史の新しいモデルの創始者となることもあなた方にはできるのだ、ということである。

私の理解するところでは、現在の政治的目的のためにアニミズム／神道の伝統を利用するためのさまざまな方法があるだろう。それはともかく、当然ながら、私のささやかな考察は、政治的な方針を度外視しており、それとはかけ離れたものである。それ以上に、私がここで考えを巡らせたのは、日本における前近代以来の空間、自然／文化、人と人との関係に関する概念的把握の卓越性についてであつた。それらは非西洋世界発の何かを必死に探しているグローバルな時代にあつて非常に興味深いものである。

二〇二三年七月二三日 ブダペシュト

シンコイ・ガール

訳注

(1) 「オーセンティシティ（真正性）」に関する奈良ドキュメント」は一九九四年に奈良においてユネスコ主催で開催された国際会議「世界文化遺産奈良コンファレンス」（奈良会議）で採択された文書で

ある。この文書は、ユネスコ世界遺産登録のための審査項目である「真正性」に関して、西洋中心的な観点からではなく、審査対象が置かれたそれぞれの文化的背景を考慮すべきであることが記載されていることで知られている。それまでの「真正性」概念は、耐久性が高く劣化しづらいため、長期にわたり保存可能な西洋の石造りの文化財や建造物が基準として捉えられていた。それに対して、木材や土などの素材で作られているために劣化しやすく、頻繁に修復が必要となるアジアやアフリカの建造物は、定期的に建材が取り換えられていたため、従来の「真正性」の要件を満たしていないものと評価されてきた。奈良会議では、こうした西洋の建造物に基づく評価基準が問題の俎上に上がり、日本における遺跡建造物の修復方法や「真正性」に関する考え方などをも参照しつつ議論が行われた結果、「真正性」の捉え方は、世界の文化的多様性に応じてより柔軟に理解する方向へと変更された。益田兼房「世界遺産条約と世界文化遺産ならコンファレンス」『建築史学』第二四号、一九九五年、四四―六〇頁。

(2) 日本語版・アンリ・ルフェーヴル(斎藤日出治訳・解説)『空間の生産』青木書店、二〇〇〇年。

(3) 日本語版・オギユスタン・ベルク(三宅洋子訳)『風土としての地球』筑摩書房、一九九四年。

(4) この記述は、ジョンコイ教授と訳者が神戸市北区有馬町の資料館「神戸市立太閤の湯殿館」を訪れた際に、同館内に設置されていた和室についてなされたやり取りから着想を得たものと考えられる。訳者はその時、日本の伝統的な和室は「部屋」ではなく「間」と呼ばれることがあると説明し、現在も伝統的スタイルの旅館や料亭では建築物内の空間の単位として「間」という名称が用いられていることや、その一方で西洋風の、あるいは近代的なホテルやレストランに

おいては、その名称はあまり使われていない印象がある、ということとを語った。また、「間」には、「部屋」を指す以外にも、「人やモノのそれぞれとのあいだに生じる空間や距離感」という意味があり、日本の伝統的な部屋としての「間」の概念や名称は、恐らくその意味とも結びついているという説明を行った。以上の説明は、正直なところ、その場で行った印象論以上のものではなく、空間に関わる諸学問における専門性や正確さに欠けるものであったかもしれない。それでも、ジョンコイ教授はこうした訳者の説明を受けて、「間」という建造物内の空間の一部を表す言葉を、「何かと何かのあいだ」に生じる空間、つまり認識主体と環境との関係性や相互作用に応じてその在り方が変化する可変的な空間認識概念であると理解した。そして、それが物理的な寸法によつて定量的に確定された場を部屋や空間として想定してきた西洋の伝統的な空間概念と異なっており、本文中でも言及されている「精神的空間」のような、より可変的な空間認識に注目することで西洋的空間概念に見直しを迫った「空間論的転回」の議論とも親和的な概念である、という比較文化的論的な所感で応じ、非常に面白い発見をしたという様子だった。